



総題 「ローマの信徒への手紙」における贖い

アドベンチスト聴覚しょうがい者友の会教材部

第7課 罪に打ち勝つ

浦島智加男 2010, 8, 7~2010, 8, 13

はじめに 8月7日(土曜日)

この課では、信仰によって義とされたクリスチャンが、この地上にあって何を目標もくひょうに生きるのかについて学びます。親が子供に期待するのは、その子が心身共に健やかに成長することです。

私たちの霊の親である神様も、クリスチャン一人ひとりが、幼子から大人へと成長することを望んでおられます。その成長の過程かてい(みちすじ)は、義認ぎにん→聖化せい化→榮化えい化と表されています。今週の学びはこの聖化です。聖化と言う言葉自体は、聖書に書かれていません。これは、神学者が造り出した言葉ですが、ロマ書の6章は聖化の意味を色々な言葉で説明しています。聖化とは、罪しはいに支配されずに、イエスキリストのきよいご品性をめざして歩むことです。

1. 恵みは満ち溢れる 8月8日(日曜日)

信仰によって、私の罪が一つ残らず赦ゆるされた、その上に「罪が増し加わるところには、恵みはいっそうみち溢れる」(ローマ5:20)のなら、罪は恵みを生み出すのだから、もっと罪を犯してもいいのでは?という質問に対して「決してそうではない」と答えます。

罪を赦されたものは、いっそう罪に打ち勝つ方向へクリスチャンの歩みは向かうべきなのです。そもそも、信仰によって義とされたしるしとしてバプテスマを受けたでしょう。バプテスマの意味を理解するなら、そんな考えはどこからも生まれません、とパウロは言います。

あなたがバプテスマを受けた時、水みづに沈められました、それは、これまで罪を犯し続けてきた生涯しょうがいを死に至らしめたという意味を持ちます。ちょうど、イエス様が十字架で死に、墓の中に葬られたように。これまでの自分は死んだのだと認識にんしきしなさい。そして、水の中から引き上げられた、それはちょうどイエス様が葬られていた墓から甦よみがえり、神としての生き方を始められたように、あなたも「イエスキリストに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」

バプテスマは1回きりの経験ですが、バプテスマの中に込められている意味は、あなたのクリスチャン生涯しょうがいの間、毎日体験するものなのです。

2. 罪が擬人化されている 8月9日(月曜日)

罪は、人間が持っている性質、考え方、行動の原理げんり(法則)であって、決して人間を離れて、罪そのものが人間のようにふるまうということはありません。「あなたの死ぬべき体を罪に支配させては・・なりません」(ローマ6:12)とパウロは、あたかも罪がその人を支配(その人の生き方を決める)している別の人間のように取り扱っている、これを擬人化と言います。

罪は、人間の欲望よくぼうに働きかけて、あなたにこうしなさい、ああしなさいと命令して、あなたの思いとは、別の行動こうどうをするように仕向ける、もう一人の人間のような不思議な力をもってい

ます。

3. 律法の下？ 8月10日(火曜日)

「あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです」(ローマ6:14) 律法の下にいるという表現は、律法を行うことによって救われようとする生き方です。これを「行いによる義」と言います。これまで、パウロは、罪びととなった人間は、決して律法を守ることはできないと何度も言っています。ですから、律法を守りきって、良い行いをして救われる道はなくなって、残されているのは、イエスキリストの十字架の贖い^{あがな}を信じれば、たとえ、良い行いは一つもできなかったとしても、恵み(救われる価値のない者に与えられる神さまからのプレゼント)を受けるという方法しかないのですよ、パウロは言っています。

4. 二人の相反する主人 8月11日(水曜日)

「罪に仕える奴隷・・神に従順に仕える奴隷」ローマ6:16 昔のイスラエルの社会は二種類の人間がありました。自由な市民と奴隷です。自由な市民がほかの人を奴隷としてお金で買うのです。奴隷となった人は、自分がこうしたい、ああしたいという願いをもつことは許されませんでした。自分をお金で買った主人の言いつけ通りしか行動できなかったのです。

ここでも、パウロは罪を擬人化^{ぎじんか}しています。そして、罪が人間のようにふるまうだけでなく、人を支配する主人のようにもなると言うのです。

確かに、私自身の体験からも言えることですが、罪は私の欲望^{よくぼう}に働きかけて、そんなことをしてはいけない、そんなことを言うてはいけないという私の思いとは違うことをしてしまうことが多いです。これは、ローマ7章でパウロも同じ体験をしていることを書いています。

「わたしは、わたしが望む善はおこなわず、望まない悪を行っている。わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのはもはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。」
ローマ7:19, 20

「わたしは、なんとみじめな人間なのでしょう。誰がこの死の体(罪が主人で、私は罪の命じるままにしか行動できない状態)から救ってくれるでしょうか。」
ローマ7:24
と叫んでいます。そこで、イエスキリストが「私の所に来なさい」と声をかけて下さったので、今はイエスキリストが私の主人になったと喜んでいきます。

5. きよきに至る実 8月12日(木曜日)

イエスキリストの血潮^{ちしお}という高価な値^{こうか}で買われ(あがなわれ)て、主人を鞍替えした(とりかえた)パウロは、罪の奴隷から解放されて、自由になりました。「罪の支払う報酬^{ほうしゅう}は死です」と言われているように、罪の奴隷であった時は絶えず死の恐怖に襲^{おそ}われていましたが、死の恐怖からも解放されました。

これまでは、罪に誘われ、欲情^{よくじょう}が刺激^{しげき}されていつも私の思い、私の行動は、誰が見ても恥ずかしいような実をならせていましたが、イエスキリストを主人としている今は、きよきに至る実(聖化)を結ぶようになりました。「行き着くところは永遠の命(栄化)^{えいか}」(ローマ6:22)です。

聖なる生活の実を結ぶこと(聖化^{せい化})は、自分の力では決してできません。イエスキリストの奴隷となって、主のお姿を見続け、主のなさった業^{わざ}をまね、主人の命令に従うことで神様から与えられるものです。